

# イタリアの「言語問題」における言語と文体の概念

ダンテ『俗語論』はどのように読まれたか

糟谷啓介

## 1 ダンテ『俗語論』における「高貴な俗語」

ダンテの『俗語論』<sup>(1)</sup>は、中世を通じて支配言語として君臨したラテン語に対抗して、俗語の地位の向上をはかった書物として言及されることが多い。大きなパースペクティヴで見れば、それはそれで間違いではないけれども、『俗語論』の内容をそのようにまとめてしまうのは、その著作のもつ微妙な陰影をとらえそこなうことになる。その理由は、ひとつには、ダンテはあらゆる点で俗語がラテン語よりも優れていると主張したわけではないからであり、もうひとつには、『俗語論』の主題は、ラテン語に対する俗語の優越性を証明することよりも、むしろイタリア半島に群れ成す俗語の統一的規範を打ち立てることにあったからである。

ともあれ、議論の前提として、『俗語論』の内容そのものを簡単にふりかえっておいたほうがいだろう。書物の冒頭でダンテは、人間の言語を、生まれながらに覚える「俗語」と「ローマ人が文法(*gramatica*)と呼んでいた二次的言語活動(*locutio secundaria*)」に分けたうえで、「このうちより高貴なのは俗語である」というテーゼを提出する(1, I, 2-4)。その理由のひとつは、俗語は「自然的(*naturalis*)」であるのに対し、「文法」は「人為的(*artificialis*)」だからであるとされる。ここで「文法」と呼ばれるものは、現在わたしたちが理解するものとは異なり、「規則に基づく文学言語」としてのラテン語を指している。こうしてラテン語に対する俗語の優越性が説かれるわけだが、その論拠となる「自然／人為」の対立は神学的根拠に基づいていることを忘れるべきではない(Mengaldo 1978: 61)。

「自然」が「人為」よりも優位にあるのは、前者が神の創造物であるのに対し、後者が人間の作り出したものであるからである。事実、ダンテは、旧約聖書の語る「バベルの塔」の罪は、人間がみずからの arte によって natura を乗り越えようとしただけではなく、natura の創造主である神をも乗り越えようとしたことにある、と考えていた(1, VII, 4)。したがって、俗語がラテン語「より高貴である」のは、こうした神学的前提から来る演繹的帰結なのであり、なんらかの経験や観察から引き出された結論ではない。言い換えれば、ラテン語に対する俗語の優越は、存在論的優越性であって、表現力の点で俗語がラテン語に優ることを必ずしも意味するわけではない。

ダンテは、自然性だけではなく、空間的多様性と時間的変異性を俗語の特性とみなしていた。このような言語の歴史的次元の発見に、ダンテの言語思想の意味を見出すこともできよう(Apel 1975)。しかし、「自然のことば」の多様性と変異性が目の前に現れたとき、それは同時に「文法」の必要性が生まれるときでもあった。なぜなら、移り変わっては消えていく言語の多様性を超えて、「変わることのないことばの同一性」(1, IX, 11)を保証する「文法」だけが、ひとびとの間の確実な伝達を可能にするからである。ラテン語が「文法」と同一視されたのは、ここから来る。それはダンテの生きた文化において、ラテン語だけが空間的・時間的変異性に侵されない普遍の秩序を体現する言語だったからである<sup>(2)</sup>。

したがって、『俗語論』において「文法」=ラテン語のもつ文化的価値はけっして否定されない。それどころか、俗語の世界の内部で言語の優劣が問題になったとき、ラテン語との近さが引き合いに出されることさえあるほどだ。一例を挙げよう。『俗語論』のなかで、ラテン語を源とするロマンス語の言語学的分類がおこなわれているのは、よく知られている。ダンテは「はい」を意味する語のちがいに基づいて、「オックのことば」「オイルのことば」「スィのことば」を区別する。現在の名称でいえば、それぞれオクシタン語、フランス語、イタリア語に対応する。つづいてダンテは、それぞれの俗語の長所を挙げていく。「オックのことば」は「より完璧で甘美なことば」で抒情詩を書いた詩人がいること、「オイルのことば」は俗人(vulgaris)のあいだで広く普及し、いかなる題材でもその散文で扱えることに、それぞれの長所があるとされる。それでは「スィのことば」の長所はなにか。それは「共通する文法に、より多く支えられている」(1, X, 2)ことにある<sup>(3)</sup>。ここでいう「文法」がラテン語を指すことは明らかだ。つまり、「スィのことば」の長所はラテン語との親近性にある、ということになる。

引き続きダンテは、イタリアのさまざまな俗語を取り上げ、それぞれの長所と短所をつぶさに検討していくのだが、そのなかでも、いくつかの俗語に対してはラテン語に忠実でないことを短所として挙げている<sup>(4)</sup>。いかに俗語が「自然のことば」であり、ラテン語が「二次的なことば」であったとしても、ダンテにおいては、「ラティウムの俗語(vulgaris latius)」とラテン語との連続性がつよく意識されていたことに注意する必要がある。

しかし、ダンテにとってのラテン語の重要性は、言語学的類縁性だけから来るわけではない。俗語に対するラテン語の修辭的・美的優越性こそ、ダンテが『俗語論』のなかで強調しようとした論点であった。この点を見逃すなら、『俗語論』を正確に理解することはできないだろう。

『俗語論』に先立つ著作『饗宴』において、ダンテは、「俗語は慣用(uso)に従うが、ラテン語は技芸(arte)に従う」(I, v)という点にラテン語の優秀性を見出していた<sup>(5)</sup>。この点は『俗語論』においても一貫して変わらない。先に述べたように、natura/arteの対立は神学的論拠に基づいていたが、このuso/arteの対立は修辭学的論拠に基づいているのである。『俗語論』第2部第4章でダンテはこう言っている。詩という概念を「修辭学と音楽にもとづいて詩的に表現された創作」と考えるならば、俗語で書いた詩人も立派な詩人であることには変わりがない。けれども、彼らがラテン語の偉大な詩人たちと異なるのは、ラテン詩人たちが「規則に従った言葉と技芸で詩作した(*sermone et arte regulari poestati sunt*)」のに対し、俗語の詩人たちは「行き当たりばったりに(*vero casu*)」詩作した点にある。したがって、「[ラテン語の]偉大な詩人たちを手本にすればするほど、正しい詩作ができる(*quantum illos proximius imitemur, tantum rectius poemur*)」のである、と。

ここでダンテは、詩作で用いるべき文体的様式のことを論じている。しかしダンテにとって、言語が高度な文体的様式による表現に到達することは<sup>(6)</sup>、すなわち言語の社会的威信の獲得につながるものとしてとらえられた。『俗語論』のポイントはまさにここにある。

ダンテは『俗語論』第1巻後半で、イタリア全土に広がる14の俗語をつぎつぎと取り上げ、それぞれの長所と短所を指摘していく。この作業はイタリアの方言分類の先駆ともいえるものだが、ダンテは客観的な分類を目指したわけではない。ダンテの目的は「イタリアの俗語がこれほどの多様性によって分化しているので、最も美しく高貴なイタリアのことばを追い求める」(I, XI, 1)ことにある。ここで「美しく高貴なことば」と言われているときの価値基準は、ラテン語が体現するような表現性と規則性である。こうして、

ダンテはラテン語に匹敵するような美的価値を満たすことばを俗語の森のなかに探し求める。しかし、ダンテは、自らの要求を満たすようなことばがひとつとして存在しないことを認めざるをえず、探索の旅は空しく終わる。ちなみに、最も好意的な評価を勝ち得るのは、フィレンツェ語ではなくポローニャ語であり、後述するように、このことが後に多くの論争を引き起こすこととなる。

議論がここまで展開したとき、ダンテは「高貴な俗語(vulgare illustre)」の理念を提出する。その際にダンテは次のような哲学的議論を展開する。数における1、色における白、全存在物における神のように、すべての個物のなかに遍在するが、特定の何者にも局在しない単純実体、理念的一者というものがある。それを「イタリアの俗語」のなかに求めたときに得られるのが、「高貴な俗語」の理念である。すなわち、イタリアの各地方の俗語にあまねく存在するが、どの俗語とも同一でなく、すべての俗語の属性の基準となるような俗語、それが「高貴な俗語」である(I, XVI)。

この「高貴な俗語」という概念こそ、後世の「言語問題」のなかで繰り返し上げられるさまざまな議論を生み出す大きな源泉となった。たしかにダンテの論述には曖昧なところがある。上で見たように、ダンテによる「高貴な俗語」の定義は、いたって哲学的で抽象的なものであり、それだけで見るなら「高貴な俗語」は多様な現実を判定するための理念型のように映る。しかし、その一方で、「高貴な俗語」は悲劇やカンツォーネのような崇高体が求められるジャンルに用いられること、今までそれを用いてきたのはイタリア各地で俗語によって詩作した「高名な巨匠たち(doctores illustres)」(I, XIX, 1)であることは、ダンテも認めている。となると、「高貴な俗語」は文学に用いられる特定の様式を指すもののようにも見える。

しかしダンテの「高貴な俗語」の理念は、それにとどまるものではない。そこには、ある種の政治的意図が刻み込まれている。ダンテは、イタリアの言語的中心となるべきこの俗語を「高貴な・中心的な・宮廷的な・法廷的な俗語」と呼んだうえで、それぞれの形容詞についてこう説明する。「高貴な(illustis)」と呼ばれるのは、その輝きによってすべてを照らし出す光源のようなものだからである(illustisの語源はlux「光」である)(I, XVII)。「中心的(cardinale)」と呼ばれるのは、蝶番(cardo)のように、すべてのものがその周りを回りつつ、それらの動きを規制する不動の点だからである。「宮廷的(aulicum)」と呼ばれるのは、「もしわれわれイタリア人に宮廷があるとすれば、この俗語はその宮殿で用いられるべき」であり、「その宮廷は王国全体の共通の家」だからである。「法廷的(curiale)」と

呼ばれるのは、ちょうど法廷( curia )が「為すべき事柄について熟慮された基準」を授けるのと同じように、そのことばが他の俗語に基準をあたえるからである( I, XVIII)

ここでダンテが述べていることは、文学語に用いるべき様式や文体に関わる範囲を超えている。「高貴な俗語」がイタリアの言語的中心をつくるのは確かであるが、それを現実にするためには、一定の政治的基盤が必要であることを認めているからである<sup>(7)</sup>。しかし現実には、都市国家の群雄割拠の状態がつづくイタリアには、文化的中心も政治的中心も存在しない。だからこそダンテは、「王の宮廷がわれわれに欠けているために、われわれの高貴な俗語は、異邦人のようにさまよい歩き、慎ましい隠れ家に身を潜めている」( I, XVIII, 3)と嘆くしかなかった。ダンテによる「高貴な俗語」の定義が抽象的にならざるをえなかったのは、このようなイタリアの政治的現実があったからである。

たしかに、「高貴な俗語」は文体のひとつの様式でもありうる。しかし、「高貴な俗語」こそが「イタリアの俗語(vulgare latium)」であること、そして「イタリア全体に属するものはイタリアの俗語と呼ばれる(quod totius Ytalie est, latium vulgare vocatur)」( I, XIX, 1)ことが言明される時<sup>(8)</sup>、「高貴な俗語」が文体の次元にとどまるものでないことは明らかである。こうして見るなら、ダンテの『俗語論』は、文学的実践の指針をあたえると同時に、「ラティウムの俗語」の同一性を証づけることで、政治的分裂を超えた次元でイタリアの言語的共同性を打ち立てようとする試みであったといえる。

## 2 「言語問題」の発生

以上が『俗語論』の内容である。しかし、『俗語論』が担った意味を明らかにするには、その内容についての議論だけではなく、その書物がたどったすこぶる数奇な運命に目をやらなければならない。

ダンテの生涯と作品を初めて描いたヴィッラーニの『年代記』やボッカッチョの『ダンテ伝』のなかで、『俗語論』の存在が触れられているにもかかわらず、その名声は他のダンテの作品と比べて、はなはだ劣ったものだった。『俗語論』は北イタリアで流布したが、そこには、俗語を熱烈に賛美するダンテに敵対するようなユマニスム文化が発展しつつあった。14世紀にはともかくも3つの写本があったが(ただしフィレンツェのものはひとつもない)、15世紀には写本も、ましてや出版も行われず、その存在はほとんど忘れ去られてしまう(Mengaldo 1978: 22-26)。しかし、16世紀に入ると、『俗語論』に一躍脚光が

注がれるきっかけとなった出来事が起きる。それは、ジョヴァン・ジョルジョ・トリッシーノという文学者が1515年頃にパドヴァで写本を発見したことである。その内容を見て感激したトリッシーノは、フィレンツェの文学者たちのサークルに『俗語論』の存在を知らしめ、さらに1529年には自らのイタリア語訳を刊行するにいたる。ともあれ、この一連の出来事が火付け役となって、いわゆる「言語問題(questione della lingua)」と呼ばれる歴史的論争が巻き起こることになる。

それでは、トリッシーノは『俗語論』のどこに引きつけられたのだろうか。そして、「言語問題」の渦のなかで、『俗語論』はどう読まれたのだろうか。その問題に入るまえに、16世紀に発生した「言語問題」の枠組みを説明しておきたい<sup>(9)</sup>。

ここでは、細かい議論に立ち入る余裕がないので、大ざっぱな視点を提供するにとどめる。まず、俗語の使用領域がしだいに拡大するにつれて、15世紀後半になると、ラテン語と俗語の対立は二者択一を迫るような敵対関係ではなく、むしろ競合と継承の関係に置かれるようになる。たしかに、教会ラテン語に替えて古典古代のラテン語の復活を望んだ人文主義者のうちには、俗語の使用に断固として反対した者がいた。けれども、人文主義から生まれた文献学的視点は、古典古代を歴史的パースペクティブのなかに置くことによって、かえって古典と現在との距離を意識させることとなった<sup>(10)</sup>。そこに生まれるのが、「かつてのローマ人がラテン語で書くように、現在のわれわれは俗語で書く」という意識である<sup>(11)</sup>。その際には、ラテン語が蔵していた「ことばの富(copia verborum)」<sup>(12)</sup>を俗語が引き継ぐことが要請される。こうなると、ラテン語と俗語は一種の並行関係に置かれるまでになる。その典型的な例としては、エラスムスによって、古典古代の規範を機械的に「模倣」するしかない者として徹底的に批判された「キケロ主義者」ピエトロ・ベンボが、後に述べるように、俗語に「模倣」の原理を導入して、俗語の規範を樹立しようとしたことを見れば十分であろう(エラスムスの批判は『キケロ主義者』(1528))。しかし、こうして俗語の正当性が肯定されるようになると、ダンテがその問題に直面したのと同じように、俗語の統一的な規範はなにかという問いが浮上してくる。これが「言語問題」発生の背景をかたちづくる。

さらに、「言語問題」を誘発したひとつの条件として、15世紀末から生じたフィレンツェの政治的・文化的地位の相対的低下という事実がある。ロレンツォ・デ・メディチの死、シャルル8世に始まる度重なるフランス軍のイタリア侵攻、メディチ家の追放、サヴォナローラの神権政治とその挫折などの出来事を通じて、フィレンツェはその政治的ヘゲモ

ニーを急速に失っていった。それにともない、フィレンツェは他のイタリアの地方に文化的モデルをあたえるような文化的威信を失っていった。しかし、その一方で、ダンテ、ペトルカ、ボッカッチョをはじめとする1300年代フィレンツェ文学は確実にイタリア全土に広まっていき、他の地方の文学者にとっても守るべき文学伝統とみなされるようになっていった。このことがどのような言語意識を生み出すかは、後に見ることとする。

さてそれでは本題にもどり、「言語問題」とは、いったいどのような論争であったのだろうか。簡単にまとめれば、それはイタリアにおける言語の規範がどうあるべきかをめぐる論争であり、そこにはおおよそ次の三つの立場があった。

1. 1300年代フィレンツェ文学語を唯一の規範とみなす「純粹主義者(puristi)」。
2. イタリア全土の教養人が用いる「宮廷語」や文学者が用いる「共通語」を規範とみなす「イタリア主義者(italianisti)」。
3. フィレンツェで用いられている口語慣用に規範の基礎を求める「フィレンツェ主義者(florentinisti)」。

「言語問題」が巻き起こるきっかけのひとつとなったのは、ヴェネツィア出身の文学者ピエトロ・ベンボの『俗語についての散文』(1525)であった。この著作では、実在の人物が登場してさまざまな議論を戦わせるのだが、その重要なテーマのひとつが言語であった。ここではベンボの議論を細かく追いかけることはせず、結論だけを述べよう。ベンボは、ラテン語に対する俗語の優位を確認したのち、多様な俗語のなかにどのように統一性を打ち立てるかという問いを提出する。それに対してベンボは、文学表現による言語の洗練化と規則化の道を指し示す。ベンボによれば、「行き当たりばったりのおしゃべり(favellare)は言語(lingua)ではない」のであり、「作家をもっていないことば(favella)は、本当の意味での言語(lingua)ではない」のである(Bembo 1978: 110)。したがって、ベンボが理想とする俗語は、文学伝統に支えられたフィレンツェ語でしかありえない。ベンボはこう言う。「言語は輝かしく尊ぶべき作家をもてばもつほど、美しく優れたものになるのだから、フィレンツェの言語は、まず引き合いに出させてもらうなら、わたしの言語のみならず、われわれが知っている限りの他のあらゆる俗語に比べて、はるかに卓越していると断言することができる」(Bembo 1978: 113、傍点引用者)

ここでベンボが「わたしの言語」といっているのは、彼の生まれ故郷の言語、すなわちヴェネツィア語のことである。ベンボが自分自身の母語ではなく、フィレンツェ語を規範

として選んだことは、たいへん象徴的な意味をもつ。それは、ラテン語との対比であれば、称揚された俗語の「自然性」が、俗語の規範を確立する際には何の役にも立たないことを示す。ベンボが理想とみなすフィレンツェ語は、1300年代の優れた文学作品のなかでしか出会うことができない。それは現実のフィレンツェで話される日常言語とは何の関係もない。したがって、「わたしの言語」を放棄しなければならないのは、ヴェネツィア人ベンボだけに限らない。その点では、フィレンツェ人でも同じことなのである。

ベンボによれば、トスカーナ人はトスカーナ語を「何の苦労もなく揺りかごと産着のなかで覚える」のだが、それに対して非トスカーナ人は「努力に努力を重ねて著作家から学びとる」。しかし、ベンボによれば、まさにこの点で、非トスカーナ人はトスカーナ人よりも有利な位置に立っているのである。なぜなら、トスカーナ人は、日常生活でトスカーナ語を話し、絶えず周囲でトスカーナ語が話されているので、ものを書くときにも、知らず知らずのうちに「庶民の慣用(popolaresco uso)」に汚染されてしまう。このようなことは、「優れた著作だけから〔トスカーナの〕言語を学ぶ」非トスカーナ人には起こりえないことだ、とベンボは言う。ベンボが理想とするのは、いかなる変化にも侵されないような言語のかたちであり、それをベンボは1300年代フィレンツェ文学に見出した。「いま生きている者が話したり書いたりすることよりも、過去の人間の作品のことばほうが優れている」のだから、「われわれは過去の時代の文体で書かねばならない」(Bembo 1978: 121)のである。

こうしてみると、ベンボは「古典」の「模倣(imitazione)」という古典主義的理念を俗語の世界に適用したといえよう。ラテン語を書くときにキケロを「模倣」するように、俗語を書くときにはペトラルカやポッカッチョを「模倣」するわけである。このようなベンボの理論は、実際にはかなりの影響力をもった。たとえば、アリオストは自作『狂気のオルランド』(第1版1516年、第2版1521年)をベンボの教義にしたがって、トスカーナ語に基づく言語的修正を加えて1532年に刊行する。そして、「自らの手本によって……われわれの純粋で甘美なことばを示したピエトロ・ベンボ」への称賛の詩行さえ付け加える(Simone 1980: 177)。

こうしたベンボの純粋主義の立場に対抗したのが、教皇庁や宮廷社会でひろく用いられていた「宮廷語」を理想とする立場であり、その代表として『宮廷人の書』(1523)を著したカスティリオーネがいる。ベンボのものと同じく、この書物も、実在の登場人物が登場して議論を戦わせるという対話篇の趣向を取っている。そのテーマは理想的な宮廷人の

あり方についてであるが、そのなかのひとつの論題として、宮廷人が用いるべき言語の作法が取り上げられている<sup>(13)</sup>。

まず、登場人物のひとりのフェデリコは、ベンボの教えを体現するかのようになり、言語の理想を手に入れるには、過去の優れたフィレンツェの作家、とりわけペトルカとボッカッチョのことは「模倣(imitare)」することが最も重要であると述べる(1955: 133=1987: 105)。それに対して、カスティリオーネの意見を代弁する人物カノッサ伯が登場し、さまざまな角度からフェデリコの説を論破していく。その意見は次のようなものだ、この世のあらゆる事柄と同じく、ことばも多様性と変異性を免れることができない。したがって、ことばにおいては、それぞれの時代の「慣用(consuetudine)こそ教師である」(1955: 146=1987: 125)。過去の優れた作家にしても、手本に盲従した者はひとりもない。彼らは「才能と生まれつきの勤」にしたがって書いたのである。(1955: 147=1987: 127)。ところが、最近「自分たちのトスカナ語にほとんど宗教に近い、いわくいいがたい神秘的な狂信を抱(く)」(1955: 150=1987: 131-133)者がいるのは困ったものだ、と。カスティリオーネが「宮廷人」の理想のことばづかいとみなすのは、「わざとらしさに陥らない」ことであり、そのためには「イタリアの諸地方から美しい上品なことばを選んで用いる」(1955: 141=1987: 119)ことが推奨される。つまり、カスティリオーネの理想とするのは「かつての純粋なトスカナのことば(pura toscana antica)」ではなく、「豊かで変化に富み、全国に共通のイタリア語(italiana, commune, copiosa e varia)」(1955: 142=1987: 121)なのである。これがカスティリオーネの主張する「宮廷語(lingua cortigiana)」の意味である。

こうしてカスティリオーネが「イタリア共通語(lingua italiana comune)」の概念を提出したことは、後の議論にとって大きな意味をもつ。というのは、言語に italiano という形容詞をかぶせることで、フィレンツェあるいはトスカナ中心主義への批判ないし対抗を表わす意味を帯びることになったからである。つまり、lingua italiana という名称は、言語の客観的な名称ではなく、「言語問題」におけるある立場を示す用語となったのである。つづくトリッシーノは、まさにこの論点をさらに理論化していく。

### 3 『俗語論』の発見と「イタリア語」の概念

すでに述べたように、はっきりと日時を定めることはできないが、トリッシーノは

1514 年末頃にバドヴァで『俗語論』の写本を手に入れたとされている。トリッシーノはその写本をローマに持参し、周囲の文学者たちに披露して注目を集める(ピエトロ・ペンボのために写本が作られたほどである)。さらにトリッシーノはフィレンツェにおもむき、その地の文学者サークル「オルチェッラーリの園」のメンバー——そのなかにマキャヴェッリがいた——に『俗語論』の内容と自らの解釈を伝え、大きな反響を呼び起こす<sup>(14)</sup>。さらに、1529 年に『俗語論』のイタリア語訳を刊行する<sup>(15)</sup>。そしてほぼ同時に、言語に関する自らの考えを記した対話篇『カステッラーノ』(Trissino 1986)を刊行し、そのなかで自らの説の論拠としてダンテの『俗語論』を取り上げる。このようにして『俗語論』は、しだいに「言語問題」の論争の圏内に引き込まれていくのである。

『カステッラーノ』以前にトリッシーノが著した『書簡(Epistola)』(1524)では、『俗語論』についての言及はなされていないが、それでもこの書物はかなりの反響と反発を引き起こした。まず問題とされたのは、トリッシーノが正書法の改革を訴えた点である。トリッシーノは、e と o で表される音の表記を二つに分け、広い e と o にはギリシア文字の ε と ω をそれぞれ充てることを提案し、この書物でそれを実践した。トリッシーノがこのような奇妙な提案をするに至った理由のひとつには、こうした書き分けを通じて俗語の地域的変異を正書法に反映させることがあった(Castelvecchi 1987: XXIII)。つまり、フィレンツェ語以外の地域変種を容認する態度がそこに現われていたのである。反論が集中したもうひとつの点は、この本の正式の書名は「イタリア語に新たに付加される文字に関するトリッシーノの書簡」であるが、そこで lingua(言語)にあからさまに「イタリアの(italiano)」という形容詞を冠した点である(Dante 2014: 444)。ここから、lingua italiana という名称に対する(とりわけフィレンツェの)文学者たちの反感がすでにあったことがうかがわれる。

トリッシーノが lingua italiana という概念にこめた意味は、対話篇『カステッラーノ』のなかで明らかにされる。まずそこで打ち出されるのは、言語の名称をめぐる議論である。トリッシーノは事物の分類原理である「類」「種」「個」の区別を言語にあてはめる。そうすると、言語における「類」は国民全体のことば(イタリア語など)、「種」は一地方のことば(トスカナ語など)、「個」は一都市のことば(フィレンツェ語など)となる。さらに語彙について見ると、ひとつの言語には、その土地でしか使われない「固有語」、イタリアの多くの地方で使われるものは「共通語」、イタリア以外の言語から来る「外来語」とされる(Trissino 1986: 60)。

そのうえでトリッシーノは次のように論じる。ダンテとペトラルカの作品を見ると、そこに使われている語彙のすべてがフィレンツェの固有語、つまりフィレンツェだけで使われる言葉だけではないことがわかる。そこには、シチリア語やロンバルディア語、さらに多くの他の地方のことばが見られる。たとえば、ペトラルカの『カンツォニエーレ』で用いられた語彙のうち、フィレンツェに固有のものは十分の一足らずであり、若干の外国語を別にすれば、ことごとくイタリアの他の地方でも使われる共通語である。そこでトリッシーノはこう結論づける。

したがって、彼ら〔ダンテとペトラルカ〕の語彙のすべてがフィレンツェのものでもトスカーナのものでもない以上、彼らの言語をフィレンツェ語やトスカーナ語と呼ぶことはけっしてできない。彼らの言語にはトスカーナのことばやイタリアの他の地方のことばが混合されており、種が他の種と混じり合えば、類の名前をもってしかそれを呼ぶことはできないのだから、彼らの言語はイタリア語としか名付けることはできない。(Trissino 1986: 65)

たしかにトリッシーノの議論には、「類一種一個」の分類にこだわる形式論理的な強引さがあることは確かである。にもかかわらず、トリッシーノの説が大きな反響を呼んだのは、イタリアの俗語文学伝統には最初から「イタリア性 (italianità)」とでもいうべき性格が刻み込まれていることを主張することで、フィレンツェの中心性を相対化することにつながったからである。だからこそ、トリッシーノの主張は、北イタリア出身の知識人におもな支持基盤を見出したのである(トリッシーノの出身地も北部の都市ヴェチェンツァである)。そして、トリッシーノは自分の説を補強するためのまたとない証拠物件を手に入れた。それがダンテの『俗語論』である。

トリッシーノは、ダンテの作品のなかの言葉づかいから、ダンテ自身が自分の作品で用いた言語を「イタリア語」として意識していたことを立証しようとする。たとえば、ダンテの詩のなかで *latino* といえ、それは *italiano* のことで、イタリア全土に共通のものであることを意味する、というように。そしてトリッシーノが何よりも重視するのは、『俗語論』における「高貴な俗語」の概念である。トリッシーノはこう言う。

しかしお望みとあれば、これらすべての難問はダンテその人によって取り除かれ、解

き明かされる。ダンテは『俗語の雄弁について』という本のなかで、イタリアのすべての言語から、高貴で宮廷的な言語(*lingua illustre e cortigiana*)を選別するように教えているからだ。ダンテはそれを「イタリアの俗語(*lingua volagare italiana*)」と名付けたのだ。(Trissino 1986: 72)<sup>(16)</sup>

トリッシーノのいう「イタリア語」とは、イタリアのすべての言語のなかから選別された要素からなる共通語のことである。そこではフィレンツェの中心性は明確に否定される。そして、この「イタリア語」の理念を誰よりも明確に示したのが、ダンテの「高貴な俗語」という概念であると、トリッシーノは考えたのである。トリッシーノが自著『カステッラーノ』と『俗語論』のイタリア語版をほぼ同時に1529年に出版したのはけっして偶然ではない。この両者があいまって「イタリア語」の理念を確立する支柱だったのである。

#### 4 マキャヴェッリ対ダンテ——フィレンツェ語の地位をめぐる

「ダンテはフィレンツェ語ではなくイタリア語で書いた」というトリッシーノのテーゼは、フィレンツェの文学者たちに大きな衝撃と反発を呼び起こした。しかもそのテーゼのよって立つ根拠のひとつとして、トリッシーノは、フィレンツェ俗語文学の栄光の象徴とみなされていたダンテの『俗語論』をもちだした。しかもそのなかには、「トスカーナ人たちはその愚昧さゆえにのぼせあがり、高貴な俗語の榮譽を不遜にも僭称しているように思われる」「トスカーナの人々は他のどの市民にもましてこうした狂気にとりつかれているのだから、かれらの地方的な俗語詩を一つ一つ引用し、自慢の鼻をへし折ってやるのがふさわしい」(I, XIII, 1-2)という過激きわまりない批判の言葉があった。だから、フィレンツェの文学者のなかには、この本を偽書とみなした者がいるほどである。

そのなかで真っ先にトリッシーノのテーゼに反応したのが、マキャヴェッリの「われわれの言語についての叙説と対話」(執筆は1515年から16年にかけてと推定、1730年に匿名で出版)である。マキャヴェッリは1512年の公職追放、翌13年の投獄を経て、当時は隠遁生活を送っており、「オルツェッラーリの園」の文学者たちとの交流が唯一の楽しみであった。その交流のなかでマキャヴェッリはトリッシーノの説を耳にしたのであろう。しかし、こうした環境のなかで、マキャヴェッリが手なぐさみに言語論をものしたと考えるてはならない。この「叙説と対話」は、その緻密な論理構成からみて「言語問題」に登

場する数多くの著作のなかで最も独創的なものひとつといえる。しかもマキャヴェッリの著作活動のうえで、「叙説と対話」は、あの『君主論』の完成から間もない時期に書かれたものであって、この二つの著作のあいだにはほそやかな反響さえ見られるほどであるが、その点は後に触れよう。

この著作を書いた理由はマキャヴェッリの口からはっきり述べられている。それは、「われわれフィレンツェの詩人と散文家を書いた言語は、フィレンツェ語、トスカーナ語であるか、それともイタリア語(*italiana*)であるか[……]という論争」(Machiavelli 1976: 4)に終止符を打つことにある。もちろん、この「論争」は、ダンテの『俗語論』に依拠したトリッシーノが巻き起こしたものである。マキャヴェッリは、イタリアで話される俗語がきわめて多様であることは認めるが、「それらのことばの間には、かなりの類似性があるので、いまの書き手は、かつての書き手がイタリア共通語(*lingua italiana comune*)で話していたかと思いたがるのはなぜか」、そして「これほどの言語の多様性のなかでわれわれがたがいに理解し合える理由」(Machiavelli 1976: 6)が探られる。「いまの書き手」の代表がトリッシーノであることは、いうまでもない。

マキャヴェッリは、イタリアの俗語のあいだで動詞の同一性が見られることや、発音とアクセントの違いが理解の妨げになるほどではないことを指摘する。このあたりの議論は、具体的な言語事実在即したものであり、マキャヴェッリの観察眼の鋭さがうかがえる。

マキャヴェッリは、こうした「イタリアの言語(*lingua italica*)」の多様性のなかで、ダンテに始まるトスカーナの作家たちがどの地方の出身であるか、そしてどのことばで書いたのか、すなわち「祖国の言語(*lingua patria*)」で書いたのか書かなかったのかを見極める必要があるという。そのためには、一方に彼らの著作をおき、他方に「人為(*arte*)ではなく、すべてが自然(*natura*)である」ような各地方のことばだけで書かれた作品を置いて、両者を比べてみればよい、とする。この部分で注目すべきは、マキャヴェッリがイタリア全土のことばを総称して呼ぶとき、*lingua italica* と言い、けっして *lingua italiana* という名称を用いないことである。もちろん、これはトリッシーノの説を拒否するためである。また、マキャヴェッリが言語に関して *natura/arte* の二分法を採用していることに注目すべきである。もちろん、『俗語論』におけるダンテとは異なり、ここでの二分法に神学的意味はまったくない。「すべてが自然である」作品とは、文学的意図をもたずに、その土地で話されるままのことばを用いた作品という意味である。このような考え方がどのような帰結を呼ぶのかは、後に見ることにする。

マキャヴェッリによれば、ペトラルカとボッカッチョに関してはそれほど問題ではない。彼らがフィレンツェ生まれで、フィレンツェ語で書いたことは明らかだからである。しかし、問題はダンテである。たしかにダンテは『神曲』のなかで、フィレンツェ以外のことばを多く用いた。このことをどう考えればよいのだろうか。こうしてマキャヴェッリは、『神曲』のなかで、さまざまな地方に由来するように見える語彙の考察に向かう。これこそ本書の最大のテーマである。なぜなら、それはトリッシーノが、文学語の当初からの「イタリア性」を主張する時に用いた最大の論拠だからである。

まずマキャヴェッリは、トリッシーノがもちだした一地方だけの「固有のことば」とイタリア全土の「共通のことば」との区別は相対的なものでしかないという。人間どうしが交流すれば、言語は絶えず接触し、その結果、たがいに語彙を採り入れあうからである。しかしだからといって、言語の同一性がおびやかされるわけではない。借用された語彙は「話すうちに、語法、格、語尾変化、発音が変わられて、その言語との調和を作り出すことによって、その言語のものになる。[……]外来の語彙がフィレンツェのものになるのであって、フィレンツェの語彙が外国語になるわけではない」。だから、どんなに借用語があったとしても、「われわれの言語がフィレンツェ語以外のものになるわけではない」(Machiavelli 1976: 12)。トリッシーノは、語彙だけに注目して「イタリア語」の理念を説いた。それに対してマキャヴェッリは、文法と発音の形式に言語の同一性の根拠を見つけた。したがって、ダンテの作品のなかにかにフィレンツェ語以外の要素があろうとも、ダンテの用いた言語がフィレンツェ語であることには変わりがない。語彙と文法を峻別して議論を進めるマキャヴェッリの言語認識には、たいへん鋭いものがある。

このあと、マキャヴェッリはダンテとの架空対話に進む。マキャヴェッリはダンテに向かって、『神曲』のなかのロンバルディア語やラテン語などの外来語彙をひとつひとつ取り上げ、それらがほんとうにフィレンツェ語でないのかどうかを考えてほしいとダンテに迫る。その結果、それらの語彙がまぎれもないフィレンツェ語の性格を帯びていることが次々と示されていく。こうして、マキャヴェッリは勝ち誇ったように、ダンテにこう告げる。

君〔ダンテ〕は、他の地方では用いられない無数の祖国の語彙(vocaboli patrii)から逃れることはできない。なぜなら、人為(arte)は決して自然(natura)に逆らうことはできないからだ。これに加えて、いかに言語は単一であることはできず、他の言語と

混じり合わずにはいないかをよく考えてほしい。他から借りうけた語彙を、その慣用(uso)に溶けこませてしまう言語、その言語はいずれかの祖国のものである。それはとても力強いので、外来語が祖国の言語の形を崩すのではなく、祖国の言語がそれら外来語の形を崩す。なぜなら、他から借りうけたものを、自らのものと見まがうほど、自分に引きつけるからだ。(Machiavelli 1976: 18)

ここで語られた「人為は自然に逆らうことはできない」というテーゼこそ、マキャヴェッリの言語観の根幹に存在するものだ。ダンテにおけるような神学的意味は、ここから完全にはぎとられている。先に述べたように、この場合、「自然」とは特定の社会で身につけた話し言葉を指し、「人為」とは文学的修練にもとづいて獲得される書き言葉を指すと考えればわかりやすい。つまり、いかなる書き言葉も、その基礎には特定の「慣用(uso)」にもとづく話し言葉があるという認識がここにはある。マキャヴェッリが作家の出身地をことさらに問題にするのは、彼らの言語形成がなされた場所を確かめたいためであった。

もちろんマキャヴェッリは、イタリア全土で共通の理解のもとに用いられる共通語があることは認める。しかしそれは、トリッシーノが主張したように、ダンテが「イタリア語」で書いたからではない。逆に、ダンテたちの著作を読むことを通じて、「多くのわれわれの語彙が、多くの他国人〔非フィレンツェ人〕によって学ばれ保持されたので、われわれに固有のもの(proprii)が共通のもの(comuni)になった」(Machiavelli 1976: 20-21)のである。しかも、フィレンツェ以外の地方の作家は、たしかに自分の方言からの借用を用いたこともあるが、そのときでも彼らはその単語の形式をフィレンツェ語に合致させるようにした、とマキャヴェッリはいう。つまり、その場合でもフィレンツェ語の言語的同一性は保たれたことになる。これこそ「君の祖国の言語の権威」(Machiavelli 1976: 21)を示すものだ、とマキャヴェッリはダンテにたたみかける。マキャヴェッリの結論はこうである。

したがって、イタリアの共通語とか宮廷語とかと呼ばれている言語は存在しない。なぜなら、そのように呼ぶことのできるものは、すべてフィレンツェの作家とフィレンツェ語からその基礎を得ているからだ。(Machiavelli 1976: 25)

マキャヴェッリによれば、他の地方の作家が書物だけからフィレンツェ語を学んでも、到底完璧の域には達しない。とくに、喜劇のように日常生活を生き生きと書きなげなければならないジャンルでは、その欠点があらわになる。ここでマキャヴェッリが挙げるのはアリオストの例である。フェラーラ人アリオストは、韻文では優れた作品を書くが、喜劇となるとまったく生彩がない。それは彼がフィレンツェで話されることばの「慣用」を身に着けていないからである。したがって、「より価値のあるあの言語〔フィレンツェ語〕に固有で特有のものを理解せずには、立派に書くことはできない。その固有なものを欲するなら、その言語が生まれた源に赴かねばならない」(Machiavelli 1976: 24)。このような見方は、「庶民の慣用」に汚されていない非フィレンツェ人のほうが、言語の規範を学ぶのに有利な地位にあるとしたベンボとは対極に立つ考え方である。そして、マキャヴェッリの見方は、フィレンツェの口語慣用に国民語の基礎を求めた19世紀のマンゾーニ主義を予告するものである。事実、マンゾーニは、このマキャヴェッリの「叙説と対話」のなかに自らの理論の有力な支えを見出す(そしてその分だけ『俗語論』は過小評価される)ことにもなるのである。

さらにマキャヴェッリの独自性を表わすのは、フィレンツェ語の優越性は、作家の文学伝統にではなく、その言語そのものに基づいていると考えたことにある。マキャヴェッリにとって、フィレンツェ語は「他のどこよりも韻文と散文を書くのに適合するように話す祖国」(Machiavelli 1976: 24、傍点引用者)なのである。マキャヴェッリの見方の底には、フィレンツェ語は言語の文法的規則性が堅固に保たれているので、他の地方の語彙を吸収する力をもつだけでなく、優れた文学的表現を生み出すことができたとする考え方がある。そのことははっきりとこう言い表されている。

フィレンツェが最上位にあり、これらの優れた作家を輩出させたのは、地の利のせいでも、才能のおかげでも、他のいかなる事情によるのでもなく、ひとえにその言語がそうした修練(*disciplina*)を受けるに適していたからに他ならない。これは他の都市には起こらなかったことだ。(Machiavelli 1976: 26)

先に、この「叙説と対話」には隠れた政治性があると述べた。その鍵となるのは、やはり「祖国の言語(*lingua patria*)」の概念であろう。この「叙説と対話」は、「わたしの祖国」フィレンツェに対する熱烈な賛美で幕を開ける。「その精神や行為でもって祖国の敵にな

る者は、親殺しと呼ばれるに値する」とマキャヴェッリはいう。もちろんこの言葉は、『俗語論』でフィレンツェに侮辱の言葉を浴びせかけたダンテを念頭においてのことであるが、著作の冒頭に置かれたたんなるレトリック的言辞とみなすことはできない。

「叙説と対話」の真の目的は、イタリア全土で共通に理解されることばがフィレンツェ語に基礎を置くことを証明することで、フィレンツェ以外の地方が「われわれの祖国から受け取った恩恵」(Machiavelli 1976: 26)を知らしめることにあった。つまり、イタリアにおける言語の統一は、今までも、これから、フィレンツェを中心にして維持されることを主張したかったのである。この考えは直接に政治的な意味をもちうる。マキャヴェッリは『君主論』においてこう述べていた。

獲得のさいに、獲得した者の古い政体に付け加えられた部分は、同じ地域と言語に属するものか、そうでないかのいずれかである。同じものに属するときには、それを保持するのは極めて容易である。〔……〕たと言語に差異が多少あっても、にもかかわらず風習が似ていれば、相互にたやすく認めあうことができる。〔……〕だが、言語、風習、制度に差異がある地域で政体を獲得したときには、さまざまな困難が生じてくる。(Machiavelli 2014: 13-14=1998: 19-20)

マキャヴェッリは『君主論』の最後で、イタリア統一に向けての熱烈な訴えを記した。ただしそれは、近代的国民国家の樹立を意味するものではなく、ローマ的共和政をとるひとつの都市による他の領土の拡張ないし併合の結果として把握された。この観点からすれば、イタリアの共通語がフィレンツェ語を基礎にして作られていることは、フィレンツェによるイタリア統一に有利な条件が生み出されていることになる。グラムシの用語法でいうなら、フィレンツェはイタリア統一のディッタトゥーラは手にしていないが、ヘゲモニーはすでに獲得しているわけである。「叙説と対話」の隠れた政治性とは、『俗語論』を引き金とした言語に関する論争を透かし絵にして、フィレンツェによるイタリアの政治的統一の姿をかいま見ようとする点にあった。その意味で、「叙説と対話」における「祖国」の無条件の礼賛は、『君主論』における愛国主義的言説と呼応するのである。

マキャヴェッリのこの著作は、刊行はされなかったものの、その内容はフィレンツェの文学者のあいだで広く知られていたようである。というのは、やはりトリッシーノへの反論であるロドヴィコ・マルテッリの『トリッシーノ書簡への返答』(1524)(抜粋は Cas-

tellani Pollidori 1978: 253-268)は、マキャヴェッリの著作とほぼ同じ内容を含んでおり、なんらかの影響関係があったことを推測させるからである(Vitale 1978: 79-80)。

フィレンツェ語の言語的優秀性を主張するフィレンツェ主義の流れは、1541年にメディチ家出身のトスカナ大公コジモ1世によって設立されたフィレンツェ・アカデミーに引き継がれる<sup>(17)</sup>。アカデミーが設立された背景には、フィレンツェの文化的中心性を取り戻そうとしたコジモの文化政策があった。フィレンツェ語とフィレンツェ文学の権威の強化が、そのもっとも重要な課題であったことはいうまでもない。それにともない、しだいにベンボの古典主義的教義が浸透してくるが、言語の慣用の介入を拒否するベンボ流の純粋主義が承認されたわけではない。そこで目指されたのは、ことばにおける「自然(natura)」と「技芸(arte)」の調停であった。ベンボのように natura を拒否するのでも、マキャヴェッリのように natura の優越を主張するのでもなく、それらは同じフィレンツェ語の異なる側面としてたがいに強化しあう関係におかれる。たとえば、文献学者ベネデット・ヴァルキは遺作『エルコラーノ』(1570)のなかで、ベンボに反対して、「書くことは言語にとって本質的ではなく偶有的なもの」(Varchi 1979 t. 1: 203)であり、「言語を話すのは民衆(volgo)から、つまりその言語を話すひとびとの慣用から習得する」(Varchi 1979 t. 2: 184)ことをはっきりと認める。しかしそれと同時に、ヴァルキは言語を「高貴(nobile)」にするためには作家の手が必要であることも認め、「明晰で優れた作家をもてばもつほど、言語は明晰で優れたものになる」と主張するのである(Varchi 1979 t. 2: 4)。ヴァルキが目指したのは、話す慣用によって身につける「言語(lingua)」と文学的形式に従った書き言葉、すなわち「文体(stile)」を区別したうえで、「言語」においてはフィレンツェの口語慣用を、「文体」においては伝統的文学語を規範にすることであった(Vitale 1978: 90-95)。

そして最終的には、1583年に設立されたクルスカ・アカデミーにおいて、1300年代フィレンツェ文学語を唯一の規範とみなすベンボ主義と、フィレンツェ語の言語的優越性を主張するフィレンツェ主義が合体する。たとえば、クルスカ・アカデミーの理論的基礎を作ったサルヴィアーティは『デカメロン注記』(1584)のなかで、「[1300年代フィレンツェ語の]純粋性は、作家のなかにあったのと同じくらい、いやそれにも増して民衆の声(voce del popolo)のなかにあった。なぜなら、民衆はその純粋な声であるがままに話したからである」と述べる(Pozzi 1988: 832)。しかしだからといって言語を規則化する作家の役割が否定されるわけではない。むしろ、ペトラルカとボッカッチョに代表される1300年

代フィレンツェ文学は、理想的な「文体」の模範として絶対的な価値を帯びる。ただし、そのときでも1300年代フィレンツェ語で書かれたあらゆる種類の文献が、守るべき規範を体現しているとみなされる。なぜなら、フィレンツェ語の純粋性は、文学作品が作ったものではなく、言語(lingua)そのものに宿るとされたからである。この点で、クルスカ・アカデミーの純粋主義の理念は、後のフランスのアカデミー・フランセーズのものと大きく異なることに注意すべきである。

それでは、ダンテの『俗語論』の運命は怎么样了のだろうか。フィレンツェの文学者たちにかまびすしい議論を引き起こしたダンテの『俗語論』は、ダンテの自身の意図から切り離されて、「言語問題」のなかの特定の潮流に結びつけられた。つまり、『俗語論』は反フィレンツェの意図を内蔵した書物として扱われた。そしてその後も、ある種の不穏な書物であることをやめたわけではない。

トリッシーノがとりあげた『俗語論』が、ダンテの真の著作かどうか疑われた理由のひとつは、トリッシーノの手によるイタリア語訳しか刊行されなかったことにある。『俗語論』のラテン語原本は、はるかに下って1577年にヤコボ・コルビネッリという文献学者の手によって、パリで初めて刊行された。そこにはカトリーヌ・ド・メディシスの息子であるフランス国王アンリ三世への献辞が付けられていた。これほどの舞台装置が必要だったのは、フィレンツェで復活したメディチ家支配をめぐる政治的かけひきがあったからである。コルビネッリは1562年にコジモ1世に敵対する陰謀に加担した嫌疑をかけられ、フィレンツェから命からがら逃亡する。各地を転々とした後、1568年によくカトリーヌ・ド・メディシスの庇護を受けてフランスに落ち着く。コルビネッリは、トリッシーノが所蔵していた写本にもとづいて『俗語論』のラテン語原本を刊行したが、その意図は二つあった。ひとつは『俗語論』の価値を認めようとしないフィレンツェ人を批判することであり、もうひとつは、自身と同じ亡命者としてのダンテへの共感を表わすことであった。1577年刊の『俗語論』には、コルビネッリの友人であり、奇人として知られた文献学者ギョーム・ポステルの文章も収められており、そこでポステルはフィレンツェ・アカデミーのベネデット・ヴァルキを激しく批判した。コルビネッリの『俗語論』ラテン語原本刊行の裏には、「メディチ家の「取り巻き」のフィレンツェの知識人への反感」(Marazzini 1990: XXII)があったことは確かである。フィレンツェ人の傲慢を手厳しく批判し、フィレンツェ語の中心性を否定した『俗語論』は、コルビネッリの政治的思いを代弁してくれたのだ。したがって、『俗語論』原本の刊行は、反メディチ、反フィレンツェの

立場を鮮明に掲げる事件でもあったわけだ。それを裏書きするかのようになり、『俗語論』が刊行された1577年にはコルピネッリの友人二名がメディチ家の刺客に襲われ、翌年には別の二名の亡命者がやはりフィレンツェから送られた者の手で暗殺された<sup>(18)</sup>。

このように、ダンテの『俗語論』はなかなか平穏な余生を送ることができず、その後も毀誉褒貶にさらされる論争の書でありつづけた。その意味で、『俗語論』は誤読されつづけたのかもしれないが、その代わりに、論争を引き起こすだけの起爆力をもちつづけたといえるかもしれない。事実、くだって19世紀には、まったく異なるコンテキストのなかではあるが、再びダンテの『俗語論』が言語問題における立場決定の試金石の役目を担うことになる。その点については別稿で論じることとする。

## 註

- (1) De vulgari eloquentia という題名をどのように訳すかという問題は、この書物をどう読むかという議論とすでに関わっている。岩倉忠具氏による『俗語詩論』(ダンテ1984)という優れた翻訳と注解があることは承知のうえで、ここではより一般に流布していると思われる『俗語論』という題名で統一しておく。
- (2) この観点からすると、『俗語論』における *gramatica* は「書記言語」を、*gramaticae facultas* は「読み書き能力」を指すという Lo Piparo(1983)の説はたいへん魅力的である。
- (3) ただし、ここには校訂の問題がある。原文は “magis videtur initi gramaticae que comunis est” であるが、述語の *videtur* を三人称複数形の *videntur* と読むべきだとするメンガルドの説がある(Dante 1979: 86-87)。そうなると、主語は「スィのことは」ではなく、前文で言及された「詩人たち」となり、文の主題は言語そのものの連続性ではなくなる。ここでは、最新の校訂版(Dante 2012: 72n.)に従っておく。
- (4) たとえば、バドヴァ人が名詞の語尾 *-tas* を縮約すること (*bontè*) やプレシア人が子音 *v* を *f* に発音すること (*vif < vivo*) など(I, XIV, 5)。さらに、サルディニア人に対しては、「彼らだけは、自らの俗語をもたず、猿が人間を真似るように、文法を模倣している」(I, XI, 7) という辛辣なことばまである。
- (5) ただし、『饗宴』のつづく箇所では、俗語に対する熱烈な賛美が捧げられる。『饗宴』では俗語賛美の比重が大きい、それでもラテン語の価値が全面的に否定されるわけではない。
- (6) ダンテの議論の前提にあるのは、「悲劇／喜劇／哀歌」というジャンルの三類型と、それに対応

した「崇高体／中庸体／卑俗体」という文体の区分である。ダンテが目指したのは、俗語が崇高体によって悲劇を表現しうるレベルに到達することであり、そのために必要なのが、ラテン語が体現するような高度な arte(技芸)なのである。この論点は『俗語論』第2巻で詳述される。

- (7) この点に関して、「高貴な俗語」の性格には、政治と文化の関係にみられるきわめて総合的な問題が余すところなく、反映されている。これらの定義によって、「俗語」の機能は、政治の分野から「文化政策」にまで拡大される(ダンテ 1984: 240-241)とする岩倉具忠氏の解釈は卓見である。ちなみに、デ・サンクティスは『俗語論』を、皇帝派(ギベリーニ)としてのダンテの政治思想を表わした『帝政論』の議論を、言語の次元に当てはめたものと解釈している(De Sanctis 1966: 155=1970: 203-204)。
- (8) 多くの注釈が指摘するように、ダンテの著作において、latium という形容詞は「イタリアの」という意味をもつ。しかし、ダンテは「イタリア」を指すときに Ytalia という名詞も使用する。この文の後半の引用は、日本語訳だと同語反復に見えるが、原文を見ると、そこには Ytalia と latium の微妙な使い分けがあることがわかる。
- (9) 「言語問題」については、あまりに多くの文献があるので、それらをつぶさに挙げることはできない。しかし何はともあれ、ダンテから現代に至るまでの「言語問題」の流れを詳細に描いた Vitale の大著(Vitale 1978)に目を通すことが不可欠である。
- (10) この点を指してフィリップ・アリエスは、「人文主義者たちの目論見が功を奏したために、かえって彼らは古典という石棺のなかでラテン語をミイラにしてしまい、ラテン語の生命を奪った」(Ariès 1972: 904=1983: 167)と述べている。つまり、古典古代のラテン語を復活させようとした人文主義者たちこそが、ラテン語を本当の意味の「死語」にした張本人であるわけだ。
- (11) たとえば、自らも詩作を手掛けるほどの教養の持ち主だったロレンツォ・デ・メディチは、俗語で作品を書いた理由を問われて、こう答えている。ヘブライ語もギリシア語もラテン語も、俗語と同じように、当時はすべて彼らの「生まれながらの母語(lingue materne e naturali)」であった。トスカーナの俗語は、14世紀の文学者たちによって十分な豊かさを獲得して、言語の青年期に在るのだから、さらに一層の仕上げをほどこせば、たやすく青年期に達するだろう、と(Vitale 1978: 26)。
- (12) 「ことばの富」はユマニズムの言語観を支えるトポスのひとつである(Apel 1975: 171)
- (13) 奇妙なことに、登場人物のうちのひとりにピエトロ・ベンボがいるのだが、言語についての議論にはまったく口をさしはさまない。この点に関して、ベンボの書物が1525年刊、『宮廷人』が1523年刊という時間的前後関係はあまり問題にしくなくてもよい。ベンボはレオ10世の秘書官を務めていたこともあって、その教説は、実際に本が刊行される以前に、教皇庁を中心とした知識人のあいだで広く知られていたからである。その当時、自説を公にすることと書物の刊行は、必ずしも一致しなかったことには注意が必要である(Castelvecchi 1986: XXXVII)。

- この点は、のちのトリッシーノに関しても言えることである。
- (14) このときトリッシーノがフィレンツェの文学者たちに写本を見せたのかどうかは、よくわからない。というのは、トリッシーノに反論したマキャヴェッリにせよマルテッリにせよ、ダンテのテキストに基づいて議論しているわけではないからである。おそらく、彼らの念頭にあったのは、トリッシーノによる『俗語論』解釈であり、『俗語論』のテキストそのものではない。
- (15) トリッシーノによる『俗語論』のイタリア語訳は、Dante 2012: 441-506 に収められている。
- (16) 『俗語論』のイタリア語訳のなかで、トリッシーノは、ダンテが「高貴な俗語」にかぶせた形容詞のひとつである *curiale* を「法廷的」ではなく「宮廷的(*cortigiano*)」と訳している(Dante 2012: 511-512)。こう訳すことで、まるでダンテがフィレンツェ語ではなく、カスティリオーネ流の「宮廷語(*lingua cortigiana*)」の支持者であったかのように見えてくるのである。
- (17) フィレンツェ・アカデミーについては、Mazzacurati (1965: 109-124)が詳しい。
- (18) 以上の記述は Marazzini (1990)にもとづく。

#### 参考文献

- Apel, Karl Otto (1975) *L'idea di lingua nella tradizione dell'umanesimo da Dante a Vico*, Bologna: Il Mulino.
- Ariés, Philippe (1972) Problème de l'éducation, in *La France et les Français*, Paris: Gallimard. (= アリエス, フィリップ(1983)「教育の問題」, 中内敏夫・森田伸子編訳『〈教育〉の誕生』, 藤原書店, pp. 115-251.)
- Bembo, Pietro (1978) *Prose e rime*, a cura di Carlo Dionisotti, Torino: UTET.
- Castellani Pollidori, Ornella (1978) *Niccolò Macchiavelli e il «Dialogo intorno alla nostra lingua» con una edizione critica del testo*, Firenze: Olschki.
- Castelvecchi, Alberto (1987) Introduzione di Trissino (1987), pp. XI-LVII.
- Castiglione, Baldesar (1955) *Il Cortegiano, con una scelta delle Opere minori*, a cura di Bruno Maier, Torino: UTET. (= カスティリオーネ(1987)『宮廷人』清水純一・岩倉具忠・天野恵訳注, 東海大学出版会.)
- Dante Alighieri (1979) *De vulgari eloquentia*, a cura di Pier Vincenzo Mengaldo, in *Opere minori*, tomo II, Milano-Napoli: Ricciardi.
- Dante Alighieri (1984)『俗語詩論』岩倉具忠訳注, 東海大学出版会.
- Dante Alighieri (1990) *De vulgari eloquentia*. Traduzione e saggi introduttivi di Claudio Maraz-

zini e Concetto Del Popolo, Milano: Mondadori.

Dante Alighieri (1996) *De vulgari eloquentia*, edited and translated by Steven Botterill, Cambridge: Cambridge University Press.

Dante Alighieri (2012) *De vulgari eloquentia*. Nuova edizione commentata delle opere di Dante, Vol. III, a cura di Enrico Fenzi, con la collaborazione di Luciano Formisano e Francesco Montuori, Roma: Salerno.

De Sanctis, Francesco (1966) *Storia della letteratura italiana, vol. I*, a cura di Niccolò Gallo, Torino: Einaudi. (= デ = サンクティス, フランチェスコ (1970) 『イタリア文学史 I・中世篇』池田廉・米山喜晟訳, 現代思潮社.)

Lo Piparo, Franco (1983) Dante linguista anti-modista, in AA.VV., *Italia linguistica*, Bologna: Il Mulino, pp. 9-30.

Macchiavelli, Niccolò (1976) *Discorso o dialogo intorno alla nostra lingua*, a cura di Bortolo Tommaso Sozzi, Torino: Einaudi. (= マキアヴェッリ, N. (1999) 「わが祖国の言葉についての談話もしくは対話」岩倉具忠訳, 『マキアヴェッリ全集』第4巻, pp. 118-132.)

Machiavelli, Niccolò (2014) *Il Principe*. Nuova edizione a cura di Giorgio Inglese, Torino: Einaudi. (= マキアヴェッリ (1998) 『君主論』河島英昭訳, 岩波書店.)

Marazzini, Claudio (1990) Il *De vulgari eloquentia* nella tradizione linguistica italiana, in Dante (1990), pp. VII-XXIX.

Mazzacurati, Giancarlo (1965) *La questione della lingua dal Bembo all' Accademia fiorentina*, Napoli: Liguori.

Mengaldo, Pier Vincenzo (1978) *Linguistica e retorica di Dante*. Pisa: Nistri-Lischi.

Pozzi, Mario (cur.), *Discussioni linguistiche del Cinquecento*. Torino: UTET.

Simone, Raffaele (cur.) (1980) *Una lingua per tutti: l'italiano. Vol. I, Lingua e storia*. Torino: ERI.

Trissino, Giovan Girgio (1986) *Scritti linguistici*, a cura di Alberto Castelvechi, Roma: Salerno.

Varchi, Benedetto (1979) *L'Ercolano, Dialogo nel quale si ragiona delle lingue, ed in particolare della toscana e della fiorentina*, (rist. anast. Milano, 1804), Milano: Cisalpino.

Vitale, Maurizio (1978) *La questione della lingua*, Palermo: Palumbo.

(引用の際に邦訳文献の訳文を変更した箇所があることをおことわりしておく。なお、本研究は JSPS 科研費 15K02409 の助成を受けたものである。)

(かすや けいすけ / 言語社会研究科教授)